
花が纏う匂い 赤い蜜

姉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花が纏う匂い 赤い蜜

【Zコード】

Z0571F

【作者名】

姉子

【あらすじ】

* たいしたことはありませんが、多少残酷描写があります、お気をつけください* 姉が連れてきたのは結婚を前提に付き合う真坂勝則。姉は完璧だった。それに比べて、いや比べられないほど何もない妹綾子。そんな彼女に勝則は「いつか大輪の花を咲かすだろう」と言つ。そして彼女が咲くとき、一つの犠牲を払つ。

「紹介するわ、この方真坂勝則さん。私と結婚を前提にお付き合いをしてるの」

姉が連れてきた男性に、一瞬にして私は田が奪われた。

綺麗な姉さん。美しい姉さん。器用で、両親の希望を一心に背負つ姉さん。どんなことも優雅にこなすその様は、妹の私も見惚れてしまつ。だから、この人がお姉さんに心奪われることなど容易いこと。

それに比らべて私は、何も誇れるものなどない。

容姿が駄目なら成績で、しかしそれもまた常にトップの姉さんには敵わなかつた。成績が駄目ならピアノで、しかしさつき同様神童と謳われる姉さんの足元にも及ばなかつた。

結局私は何もかも姉さんには勝てはしない。

「綾子さん、ですよね？」

彼もまた、美しい青年であつた。さらに心優しく、私を中傷した男供とは格が違う。

「は、はい」

「綾子さんのいれてくださつたお茶は本当においしいですね」

「やつなの、綾子のいれるお茶は日本一よ」

姉さんは決して悪い人ではない。むしろ天女のようにお優しい方だ。だからこれは単なる嫉妬であって、目の前で中睦まじい様子を見せられ腹を立てているのはただの僻みだ。

醜いのはただ一人、私なのだ。

「よろしければ今度お話させてください」

「いやだ、勝則さん。私の恥ずかしい過去でも綾子から聞きだすつもり?」

「ははっ、綾子さん、お願いできますか?」

姉さんに恥ずかしい過去などありはしない。しかし今はそんなことどうでもいい。勝則さんと2人きりで話す機会が巡るなんて思いもせず、天にも昇る気持ちだ。

私は一つ返事で了承した。

「綾子さんは静子さんのことをどう思っていますか?」

勝則さんの案内に入つたのは、上品でとても高そうな店だった。最初に勝則さん一押しの甘味を味わい、そろそろと私の歴史を辿り時

々勝則さんが相槌代わりに自身の話をしてくれた。

彼は姉同様非の打ち所のないような素晴らしい男性であることを思い知られ、同時に私の心が惹かれていくのを確かに感じた。

「両親の次に尊敬できる、自慢の姉だと思つております」

彼が姉さんの婚約者だから、身近な第三者に尋ねるのは当然だろう。しかし、今姉の名前は聞きたくなかった。今この瞬間に私と勝則さん以外は邪魔だった。どんなに自慢の姉だとしても。

「彼女は素晴らしい人です、本来ならば私は」とき男が娶れるような女性ではないのはわかつております」

「そんな！」

反射的に否定した。でもそれは姉さんのためではない、あくまで勝則さんのためだった。

「精一杯金森家に尽くし、静子さんを守つていきますのどうか今後ともよろしくお願ひしますね」

しかし彼は気づかないだろう。そして包み込むように私の手を握る勝則さん。きっと純粋に家族として迎え入れらればこんな思いにはならなかつたのに。

憎らしいのに、愛しい。

悲しいの」「うれしいだなんて。

「よろしく・・・お願ひします」

それから私の彼への思いは募るばかりだった。だんだん2人が一緒にいるだけで吐き気を覚えるほどだ。

欲しい。

あの人気が欲しい。

夢の中にも彼は現われた。でもその彼は姉さんではなく、私と寄り添い愛し合っていた。幸せだった。しかし目覚めると同時に押し寄せるむなしさと焦燥感、それだけは拭いきれずに涙を流し自分を慰めなければ起き上がることも困難となっていた。

そんな地獄のような日々が続いていたある日、それは起つた。

「もういい、勝則さんなんて知らない!」

滅多に声を荒げる」とのない姉さんが、そう言い放ち家を飛び出した。

「静子!...」

それを追う勝則さんの表情もまた、見たこともないような焦りを生み出していた。私は裸足で飛び出そうとした勝則さんを必死で引きとめた。

「勝則さん！落ち着いてください！」

「離せ……！」

私の体はいとも簡単に壁にたたき付けられた。鈍い痛みが右腕を中心に戻りずっといた。

「綾子……」

息が止まるかと思った。

「大丈夫か？！すまない……ああ、こんなに赤く。奥の部屋で治療しよう！」

見上げるとそこにはいつもの勝則さんだつた。ただし少し疲れてこるような、青白いのは見間違いではないだらう。

私が抱き上げられ部屋に連れられるまで、耳元には彼の鼓動を感じた。左側には温度を感じた。頭の中では呼び捨てされた名前がこだ

まし、私の内部を駆け巡り熱くさせた。

世界に私と彼しかいないかのように思えた。

「本当にすまない・・・我を忘れて女性に暴力をふるうなんて最低だ」

「気にしていません、治療もしていただけましたから」

「・・・君は優しいね、本当に」

そつと髪に触れる指が酷く艶かしく見えた。その仕草は夢でよく見る。私の心臓はもう一度止まつたかのようだった。

「静子と・・・ちょっと意見の食い違いでね、彼女も頑固だから。私が折れればよかつたが、変なところで意固地になつてしまつて」

君にも迷惑をかけてしまつた、と彼は目を伏せた。私は動く左手を彼の頬に寄せ首を振つた。

「姉さんもきっと悪いと思つてゐるはずです。勝則さんがそんなに落ち込む必要はありません。それに私のことは気になさらないでください・・・その・・・それだけ姉さんことで必死だったのでしょ?」

自分で言つて、自分で落ち込んだ。わからきつてゐることを言葉にするとこつのは想像を絶する苦しみを伴つらじい。しかしその言葉

で、勝則さんはとんでもない行動に出たのだ。

「かわいいな君は、本当の妹のようだよ」

右腕を労わるように、しかし力強く私を抱きしめたのだ。もう私は息をしてこらのか、生きているのか死んでこらのかさえあやふやになってしまつほどどの混乱に陥つた。

「か、勝則さん・・・」

「君のよつな女性はきっとすぐ誰かのものになつてしまつんだろうね。兄としては寂しいばかりだ」

「そんな、私のよつな女・・・誰も嫁に迎えではくれません」

ふつとぬくもりが消えたかと思つて、田の前に眉間に皺を寄せた勝則さんの顔が現われた。

「やう自分を卑下するのほおやめ。君は静子に似てとても美しく聰明な女性だとこいつことを直覺しなやい」

しずく。

「姉さんのよつこ・・・」

「ああ、綾子さんはおつとまだ開ききつてない花だ。そう時間が過

たないうちに大輪の花を咲かし、数多の男をその匂こと蜜で虜にしてしまつだらうね」

綾子、さん。

「本当……？」

「きっと、やうなつたときは私は少々やきもちをやこてしまつかも
しれないな」

田の前で起りてこる」と、今耳に聞こえる」とは眞実だらうか。
胸が熱い。船上のように揺れ動く床。はだけた先に見える肌。

「嘘……」

「嘘じやない、君は美しい

止まらない。

「綾子さん……？」

「綾子……つて、呼んで。お願ひ」

「どうしたんだい？もう治療はすんだ、ちゃんと服を整えて

「ううが、ここが痛いの。お願ひ」

自らではだけた胸元に勝則さん、勝則の手を誘つた。彼はどうこう

ことかわからず、されるがままだつた。まだ未発達のそれは、勝則を満足させるには程遠い。

「な、何を？！」
「痛いの・・・あなたが・・・勝則が好きで・・・好きで・・・苦しい」

正氣を取り戻した勝則は私を突き飛ばした。しかし今度は謝罪はない。代わりに眼差しが、酷く冷たく私に突き刺さつた。

「じ、じりこり」と・・・勝則さん・・・？」

都合がいいのか悪いのか、恐れおののくよつて勝則の背後にいたのは飛び出したはず姉さんがいた。

「静子？！」
「まさか・・・まさか綾子と・・・」
「違う！これはただ」
「やめて！もう私を惨めにさせないで！」

姉さんは勝則の言葉を耳にもせず、再びその場から消え去つた。勝則は今度こそ追いかけ、広い部屋に私だけが取り残された。

「やめろ……」

それからすぐに勝則の怒号が鼓膜を振るわせた。それから漂つてきたのは鉄の匂いだった。

「貴様……なんてことを

次に勝則が現れたのは濃厚な血の匂いをまとひ、変わり果てた姉さんを抱き上げている姿だった。

「何故……こんなこと……」

「私のせい? 違うわ。全てはあなたが悪いのよ」

「黙れ!」

勝則は震えていた。それは悲しみからではない、激しい怒りからくるものだとわかった。しかしそれが何だというのだろう? 私が日々耐えてきた悲しみに比べればこんなことぐらいで。許さない。姉さんのためにその美しい顔を歪ませるなんて。

「ねえ、私と契りを交わしてくれる?」

「ふざけるな! 貴様姉が自殺したのに何も感じないのか!」

「何も? いえ……そうね、うれしいわ。姉さんは負けたのよ私に。愛とは生き延びてこそ意味があるのに」

「なんて……狂ってる! お前は狂ってるのがわからないのか? !」

「どうして？ 勝則を愛してるだけなのよ」

「もう喋るな！ 胸糞悪い！」

「汚い言葉、勝則ともあらう男が」

「呼ぶなー私の名を呼ぶなー」

名を呼ぶなと怯える勝則。私に怯える勝則。それでいいの、私をもつと感じて。私だけを見て、その死体はもうただの死体。あの美しい姉ではない。醜い、ただの肉。

「お前が生き延びることに意味があるとこいつのなら・・・」

取り出したのは真っ赤に染まつた出刃包丁。先ほど姉さんの命を奪つたそれは、無常にも勝則の心臓の真上に深々と刺さつた。

「勝則ー！」

ああ、勝則の血が噴水のよう。私を汚す。清める。貶める。

「許さない・・・姉さんと同じ道なんてー！」

かつて姉だったものを蹴り飛ばし、私は勝則の脣に自身の唇を寄せた。しかし、いくらもつと深くと願つても決して勝則は許さないかのように固く唇を閉ざしたまま、絶命した。

残されたのは、2つの人だったものと人の形をした魔物。

「勝則……姉さん……」

流れるのは涙なのか、私の目から流れ出すのはそんな清らかなものだつたどうか？目の前に横たわる、愛しい人。美しい姉。全てなくなつてしまつた。消してしまつた。奪してしまつた。

「ああ……私……私……綾子つて、呼んで？」

綾子と、

綾子と呼んで。

そして私は

(後書き)

久々にダークは清清しいです、逆に。なんか・・・性格を疑われそうだ・・・。基本的に作者は楽天的ですよ、いつもこんなこと考へてるわけじゃないですよ！ただ・・・時々無性にこんなものを発表したい衝動に駆られるのをお許しください！そして読んでいただければ泣きます！感涙です！！

つて、あとがきの時点で読んでいただけてるんですよね、直点・・・！ありがとうございました！どうかこれに懲りずに今後ともよろしくおねがいしますね！それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0571f/>

花が纏う匂い 赤い蜜

2010年10月21日23時52分発行